

所属	文学部	身分	教授
氏名	若林 茂則		
NAME	WAKABAYASHI, Shigenori		

## 1. 研究課題

(和文) 第二言語としての英語の使用に見られる形態統語的特徴

(英文) *Characteristics of the use of morphemes and syntax in L2 English*

## 2. 研究期間

2年間

## 3. 研究の概要 (背景・目的・研究計画・内容および成果 和文 600 字程度、英文 200 字程度)

(和文)

生成文法に基づく第二言語習得研究では、第二言語話者の拘束形態素の習得・使用の原因について、統語知識に原因があるとする表示欠陥モデル (Roger Hawkins ら) と統語知識ではなく形態音韻知識・処理に原因があるとする表層形態素欠落モデル (Bonnie D. Schwartz ら) で論争が行われている。本研究では、日本人英語学習者の英語使用に見られる形態統語的特徴について、特に、3人称単数現在の動詞屈折・sの使用を中心に、私自身や指導学生が行った実験結果などに基づく実証的研究を行なった。実験の結果、動詞屈折に関しては、音韻的環境は使用にほぼ影響を及ぼさないが、その一方で、数素性と人称素性との間に一致に関する敏感度に違いがみられること、統語環境による影響がみられること、また、パフォーマンス要因による影響が見られることなどがわかった。この結果から、第二言語学習者の誤りにはいくつもの要因が重なっており、単純な二つのモデルは、両方とも正しくないという結論が導き出される。これらの要因がどのように言語使用に関わってくるかについては、様々な要因が一度に働くのではなく、言語知識の使用を可能にしている各モジュールおよびインターフェイスで、それぞれ特定の要因が働くと考えるほうがより説明力がある。

(英文)

In recent generative studies on SLA, errors in the use of bound morphemes by L2 learners are attributed either to a representational deficit or to missing surface inflection. Data on the use of 3<sup>rd</sup> person singular 's by Japanese speaking learners of L2 English strongly imply that their errors are attributable both to a representational deficit and to missing surface inflection; in fact, multiple factors at multiple levels are involved. I suggest that it is more plausible to conclude that specific factors trigger the appearance of errors in each module and at interfaces in and out of linguistic knowledge rather than multiple factors operating at once.

【学術論文】(著者名、論文題目、誌名、査読の有無、巻号、頁、発行年月)

【学会発表】(発表者名、発表題目、学会名、開催地、開催年月)

Shigenori Wakabayashi *re* Developmental changes in the use of English  
wh-words by Japanese native speakers, International Symposium on  
Bilingualism, Oslo, June 2011.

【図 書】(著者名、出版社名、書名、刊行年)

【その他】(知的財産権、ニュースリリース等)